四月十七日　石油は四十年でなくなるが、石炭は二百五十年は十分だという。新潟市太郎代に電源開発会社が二百万キロワットの石炭火力発電所を計画している。正式申し込みでないが考えておきたい、と県の東港開発局長からきいていた。秘密にしていたのだが、日経新聞がスクープし、各社が追っかけ相次いで報道した。これにつき東港開発事務所の総務課長が計画書を持って釈明にきた。それによると、オーストラリアからの輸入炭で、事業費は三千六百億円、用地は百ヘクタール必要だが、昭和六十三年完成後十五年間に、石炭殻で海域百五十ヘクタール埋め立てて工業用地を造る、というもの。県や関係市町とともに公害防止計画を見守ってゆく。

四月二十一日　昭和四十三年から二年間、人口三万人市制特例法制定運動にほん走した期成会の当時の役員が、会長市の三重県久居市に集まり、久しぶりに懇談会を開く。改めて調べてみたら、特例による新市は全国に七十二市ある。この中には、特例期間中の町村合併により三万人を超えたところが五市、琉球政府当時の法律によるところが三市ある。特例期間経過後自治法の規定により、五万人を超えて市制を施行したところがほかに四市ある。現在市の総数は六百四十六市である。しかし、日本海側での新市は豊栄市と他に二市だけである。日本の都市化はなお続いているが、相変わらず裏日本は解消されそうにない。

四月二十七日　私事で恐縮だが――小学一年になった孫に昔なつかしい六角だこを造ってやる。そこへ、笹山の塗装屋服部秀春さんが来る。服部さんは尺八を吹くだけでなく、自ら尺八を作る特技と趣味をもっている。今の子どもはおもちゃは買うものとし、自分で造ることを知らない。無器用な、創造のよろこびをしらない人間になる。親も教師も考えてみるべきでないか。

四月二十九日　森下自治会の環境整備事業完工式。「みんなで築く村づくり」をキャッチフレーズに、生活改善センター、地元道路舗装、神社の境内を利用した公園と子どもの遊び場、転落防止のための用水路の金網の蓋など、必要な事業を次々と実施してきた。行政に依存するのでなく、部落住民自らが問題解決にとり

市長の日誌　石井耕一

くみ、各種行政の助成制度を最大限に活用する、というものである。私たちも援助する張り合いがある。

五月一日　福島湯クリーン作戦で、多くの人たちとゴミを拾う。不心得者の捨てたゴミを拾う仕事はまったくバカらしい。バカを覚悟で奉仕してくれたこの人たちの尊い心を汲み、みんながゴミを捨てないでほしい。

五月五日　今日は子どもの日、これからは子どもの季節、そして水死事故の季節である。毎年言うことだが、豊栄市では河川や水路に沿った道路が数百キロある。これに防護施設をすることは実際上不可能である。学校、幼稚園、保育園の教育指導と、保護者の監視を厳にお願いしたい。

五月十七日　新発田・北浦の町村長とともに、十三日間の予定で中国視察に出発する。帰ったら報告会を開きたい。

議会から優良団体として表彰されました。がん張らなくてはと思っています」

大変な仕事ですね

「〝食生活改善推進員です〟なんて言ったって一般の人にはなかなかわかってもらえなくて…　早通地区は公民館に調理室がないものですから、自分の家を開放したりしてきました。でも、このたび、多くの仲間（推進員）ができたので手をとりあっていけるし、やりがいがあります」

昨年度は減塩運動に力を入れたようですが

「昨年度だけでなく、以前から運動を展開していることなんです。とにかく、塩分をとり過ぎるきらいはありましたね。特に農村部などでは、その傾向が強かったようです。おもしろい話があるんです。塩分を少なくして、みそ汁漬物を作り、食べてもらっんです。そうしたら〝こんなしょっぱいもん、家では食べていません〟と。やはり塩からいものは、からだに悪いと思っているんですね」

五十苅さんは、多方面でご活躍ですね

「多方面だなんて、家庭奉仕員、県統計調査員、消費者協会会員、家庭学級級長などです。みんな一貫性があるんで、自分のためには勉強になります。家庭奉仕員は、本当に情で感じる仕事です。老人や身体の不自由な人たちといると、頭の下がる思いがします。必死で生きようとしている人、人並のからだになろうとしている人、この人たちとお話するのがとっても楽しみなんです」

五十苅さんは東京都出身。塩分の関係は、関雅之さんの誤りでした。

訂正とお詫び
先月号の関正之さんは、関雅之さんの誤りでした。

土偶は語る（25）

鳥屋遺跡

土偶というのは、人の形につくった土製品をいうのですが、鳥屋遺跡からは土偶の胴と足が発掘されました。土偶は、ほとんどが女性像で乳房やでんぷを大げさにし、特に妊婦を現わしたものが圧倒的に多いので、女性の生殖からきた豊穣を祈る女神信仰の対象と考えられます。男性や女性のシンボルを祭ったと同じ心理なのでしょう。また、不思議なことに土偶が完全なまま出土するものは少なく、どこか欠けているのです。土偶の一部をこわすことによって自分の病気や災害の身代わりにするためだともいわれています。鳥屋も胴と足しかなく、私が採集した黒川村坪穴は胴だけで二本松は足だけしかありません。土偶は人間そのままの顔よりも異様な顔が多いのです。私が茨城県の友からいただいた立木貝塚の図9は、みみずく土偶といわれ、耳飾りをつけています。図10は頭の形が山のようなので山形土偶といわれています。鳥屋土偶の足は、山形土偶の足とそっくりなのですが、残念ながら顔はわかりません。装飾品としては、石田喜一郎さんの子供さんが梨畑から拾った縄文時代には数すくない管玉と、このたび発掘された耳飾りがあります。耳たぶに孔をあけてはめこんだものだそうです。図10は表裏に美術的な工字文をつけ朱を塗った装飾品で、二個発掘されました。横に穴がなければ耳飾りですが、穴があるのでひもを通して胸飾りにしたのでしょう。今まで例がないそうです。赤と黒うるし製のこわれた玉と、小さな細工物の破片もでました。また、朱も沢山でました。鳥屋人はうるしや朱の使用を知っていたのです。

―畠山　佑二記―

はし

(14) 高橋

北蒲西南部消防センター、内沼沖部落の脇を通り福島潟へ流れる大通川。その最も下流に架かる高橋。

今月は、内沼沖の大川正三郎さん（六八歳）に語ってもらいました。

橋も昔とは大分変わったでしょうね。

「そうだね、昔は流れが四つあり、橋も四つ架かっていたんさね。確か昭和十年頃だと思うが現在の橋だけになったんさね。この辺は水害とは切っても切れない所で、そのたびに縄で橋をつないだもんですさ。水にはみんな泣かされたね。」

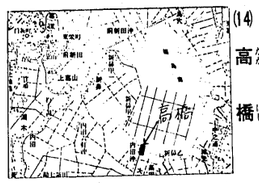
現在この橋を利用する人は一新外乙、高田（笹神村）部落の農家が耕作のために利用するのがほとんどだろうかねえ。昔は、笹神のカカサたちが笹などを担いで、葛塚の市場へ売りに通ったりもしたんだけどね。」

子供の頃の想い出は

「ガッポで造った、ヨウモツ小屋で一晩中魚を採ったりしたことがあってね。もちろん泳いだこともあるさね。あの頃に比べると深さはあまり変わらねども、川幅は二尺位狭くなったね。それに福島潟で部落総出で、オイモノをやったものです。漁のある時はホラ貝を吹いたりしてね。いやあ、懐しいですねえ。」

「現在部落は、三十八世帯だがね。当時からの家は六軒で、その中でおれんところが一番古いらしくて、〝高橋んしょ〟と言われていたんですさ。橋が丁度家の前だし、おれの記憶ではその辺が高橋の由来みたいなものだろうかねえ。戦争後ガラスアンプル業者とか、内沼潟開拓団などが入って来て、一時は五十軒位にもなったこともありましたんさ。」

高橋は現在工事中で、来年三月末頃には新しい永久橋に姿を変えようとしています。



写真は、現在の高橋。来春には永久橋に姿をかえます。

やあ!! おげんきですか

食生活改善推進員会長　五十苅（いそかり）貴美子さん（早通南四）

〝一人で6役〟
がん張り奥さんの五十苅さん
食生活改善推進員会議の合間に、インタビューに応じてくださいました。

食生活改善推進員とは

「そうですね、言葉のとおりです。食生活や食品衛生について、今までのやり方でいいのだろうか、考え直す必要がありはしないかと、みんなで研修し、それを地域へ持ちかえって普及させる役目とでも申せましょうか。」

実際どんなことを

「キッチンカーによる料理教室、成人病予防の住民検診、それに手づくりおやつの栄養教室などです。早通地区では、老人クラブや婦人会の会合などへ出て、実際に食べてもらったりしています。市の協議会は、三月に県食生活推進協